



ほとけの子

HOTOKE no KO SERIES

No.3

親鸞聖人

しん

らん

しょう

にん

出家



SHINRAN SHONIN

たんじょう さい
誕生～9歳

1173(承安3)年、京都に生まれました。父は日野有範(藤原氏末流の公家。朝廷の役人)、母は吉光女と伝わります。聖人は幼くして両親と別れ、伯父の日野範綱に引き取られました。

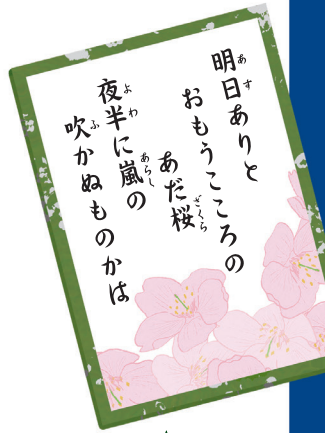
ころ
その頃

- 貴族中心の平安時代から武士が力をもつ鎌倉時代へ。
- 戦乱、自然災害、大火、飢饉、疫病の流行で、大勢の人が死ななければならぬ時代でした。

しゅっけ
出家

出家とは、家庭生活を離れて仏弟子となり、あらゆる道に立ち、歩むことです。

1181(養和元)年春、9歳になった聖人は、慈円のもとを訪れ、青蓮院で真夜中に得度式(僧侶になるための儀式)を受け出家したと伝わります。その後、29歳まで比叡山(仏教の総合大学のような場所)で懸命に修行や学問にはげみました。



聖人が得度を願った時に詠まれたと伝わる和歌
明日があると思う心は、散りやすい桜の花のようなもの。
夜中に風が吹かないとは限らないのですから。



みなさんは、「別の家に生まれたかった」とか「違う自分に生まれたかった」と思うことはありますか？ 男の子に生まれたこと、女の子に生まれたこと、いま通っている学校のこと、いま子どもであること……自分で選んだわけではなくて、気が付いたらそうなっていて、自分の力ではどうにもならないこと……でもあきらめたくないこと、あきらめられないこと。

親鸞聖人は幼いころにお父さん、お母さんと別れ、九歳の時に出家をしてお坊さんになりました。お父さん、お母さんと離れて暮らしたことは、親鸞聖人が望まれたことではないでしょう。出家をしたこともご自身の選に先立って、そうするしかない事情があつたのかもしれない。私たちがそうであるように、親鸞聖人もまた、思うようにはならない

日々を生きておられたのでしょうか。

しかし親鸞聖人は、その自分の力ではどうにもならない現実をあきらめてしまうことなく、出家を縁としてご自身が、そして人々が救われていく道を、仏さまの教えにたずねていかれました。その道を、投げ出してしまうことなく歩み続け、出遇われていったのがお念仏です。

どんな人も「この家」を「この自分」を選んで生れてきたわけではありません。そのことに苦しむことも悲しむこともあるでしょう。そういう私たちにお念仏が届けられているのです。どうにもならない現実をあきらめてしまうことなく道を求めていかれた親鸞聖人が、いま私たちに届けてくださっているのです。

〈愛護テーマ〉

南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう

